

【研究ノート】

石田・毛利連合政権の発給書状についての時系列データベース（補遺）〔その2〕

白 峰 旬

【要 旨】

『史学論叢』46号（別府大学史学研究会、2016年）に発表した拙稿「豊臣公儀としての石田・毛利連合政権」において、「石田・毛利連合政権の発給書状についての時系列データベース」を表1として提示した。本稿は、その補遺として、毛利輝元が発給した書状を中心として収録し、それ以外に、石田・毛利連合政権の政権担当者以外の発給書状も広く集めて収録した。

さらに、本稿の「緒言」では、大阪城天守閣所蔵「(慶長四年) 閏三月九日付大谷吉継書状」について、若干の考察をおこなった。

【キーワード】

豊臣公儀、石田・毛利連合政権、毛利輝元、毛利三代実録考証、萩藩閥閥録

※拙稿「石田・毛利連合政権の発給書状についての時系列データベース（補遺）〔その1〕」（『別府大学紀要』60号、別府大学、2019年）より続く。

石田・毛利連合政権の発給書状についての時系列データベース（補遺）

月日	発給者	宛所	内容(摘要)	史料典拠
(慶長5年) 7月21日	毛利輝元	益田元祥	今朝、(大坂を?) 出立したことを了承。人数等について尽力して出陣したことを祝着とする。いよいよこの時の肝煎りを頼み入る。相杜元祿と相談して「其表」の様子を聞くため、この者を指し上らせる。	山口県史・近世1下-33～34頁
—	—	—	<p>慶長5年の石田三成の一乱の時の「出張人数」</p> <ul style="list-style-type: none"> ▼雑兵共に823人（その内、本役530人、分過293人） ▼馬120疋（但し、小荷駄共）（その内、本役51匹、分過69匹） ▼昇27本（牛の丸四半馬躰1本、寺戸弥六左衛門持の久文字旗1本、白口大明神旗1本） ▼鉄炮300挺 ▼弓50張 ▼鎗100本 ▼武者奉行…増野藤右衛門尉 ▼昇奉行…大谷七郎右衛門尉 <p>※これは、毛利家家臣の益田元祥の出陣における兵力数の内訳と考えられる。</p> <p>※分過は「過分」という意味なので（『日本国語大辞典（第二版）』11巻、1111頁）、本役以上の賦課という意味が。</p> <p>※鉄炮、弓、鎗の数を比較すると、鉄炮が最も多く、弓の6倍、鎗の3倍である。</p> <p>※関連史料として、「益田元祥扶持方勸渡申請付立（慶長五年八月一日付）」（益田家文書4-849号）、「益田元祥扶持方勸渡申請付立（慶長五年九月一日付）」（益田家文書4-850号）がある。</p>	山口県史・近世1下-34頁
(慶長5年) 7月22日	毛利輝元	益田元祥	「其元」に着いたことを了承。「当手人数」のことは「勢多普請一篇」なのでその心得をするように指示。毛利秀元は明日（7月23日）出立する。安国寺惠瓊が出陣したので、万事相談するように指示。	山口県史・近世1下-34頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 7月23日	毛利輝元	益田元祥	今朝も申し遣わしたように、各自を上らせているので、同様に勢多を越えるように指示。状況については安国寺恵瓊が述べる予定である。林元善の口上に述べるように、「先様」において万事心遣いをして各自が助け合い油断しないように指示。	山口県史・近世1下-35頁
(慶長5年) 7月23日	毛利輝元	桂元方	「其元之事」は佐世元嘉と相談して万事油断しないことが肝心である。「此表之儀」（大坂）は諸人質を取り固め、そのほか城（大坂城カ）の普請等を緩みなくおこなっている。	萩藩閥閥録・3巻-604頁
(慶長5年カ) 7月23日	毛利輝元	記載なし	※石舟や人数についての記載があるので、何らかの城普請か？ よって、慶長5年以外の可能性もある。	萩藩閥閥録・3巻-604頁
(慶長5年) 7月26日	毛利輝元	益田元祥	昨日（7月25日）、勢多に到着して陣替したことを了承。そのところ（勢多）での普請を急ぐように指示。いろいろと相談のため、この者を遣わす。各自が相談して遠慮なく（毛利輝元の方へ）考えを申し越すように指示。 ※益田元祥が勢多に着陣したのは7月25日であったことがわかる。そして、勢多で普請を急いであるように毛利輝元から指示されたこともわかる。	山口県史・近世1下-36頁
慶長5年7月26日	小早川秀秋	—	禁制…東寺境内（3ヶ条） ※書止文言は「仍如件」である。 ※慶長5年7月26日付の禁制を小早川秀秋が出したということは、7月26日の時点で小早川秀秋が東寺周辺に布陣していたか、或いは、すでに通過していた、と考えられる。 ※義演准后日記2-204頁（7月25日条）には、小早川秀秋の制札を当所（醍醐）の南北の構えに打つ、と記されているので、7月25日の時点で小早川秀秋が醍醐周辺に布陣していたことを示す。 ※この禁制については、渡邊大門氏の論文「関ヶ原合戦における小早川秀秋の動向」において、すでに提示されている。渡邊氏の同論文では、この禁制について「秀秋が禁制を発給している」ということは、東寺において秀秋の軍勢が乱妨狼藉	東寺文書聚英-360号

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
慶長5年7月27日	毛利秀元	—	<p>を働くことが予見されたからであろう。つまり、秀秋の軍勢が西軍のなかでも、かなり有力な存在であったことがうかがえる。」と指摘されている。</p> <p>禁制…東寺境内(3ヶ条) ※書止文言は「仍下知如件」である。 ※慶長5年7月27日付の禁制を毛利秀元が出したということは、7月27日の時点で毛利秀元が東寺周辺に布陣していたか、或いは、すでに通過していた、と考えられる。 ※義演准后日記2-204頁(7月25日条)には、毛利秀元が数万で近江へ進発したと記されている。</p>	東寺文書聚英-359号
(慶長5年)7月29日	毛利輝元	佐波広忠・村上元吉・村上景親	<p>定(3ヶ条)…「先様」(＝阿波国徳島)において、諸事を両三人で相談して、外聞をしかるべきように調えることが肝要である。地下人と「申分」がある時は、先方の家中衆(＝韓須賀家の家臣)と相談して、ありのままにすること。狼藉を禁止する。</p>	萩藩閩閩録・2巻-638頁、639～640頁 山口県史・近世1下-36頁
慶長5年7月29日	長束正家・増田長盛・前田玄以・毛利輝元	佐波広忠	<p>阿波国猪山城(徳島城)の山上・山下以外は陣取をしないように命じる。乱妨狼藉の者がいた場合は、すみやかに成敗を加えるように指示。 ※大老の毛利輝元と三奉行が連署して出していることから、この下知は豊臣公儀として出したことがわかる。 ※書止文言は「仍下知如件」であり、年次も記されているので、この文書は直状形式であることがわかる。</p>	萩藩閩閩録・2巻-638頁 山口県史・近世1下-36頁
(慶長5年)7月29日	大谷吉継	(島津義弘)	<p>昨晚招かれて大酒をいた^{まじ}いただいたことを諷する。(大酒のため)現在臥せていて沈^{しん}酔(酒に酔いつぶれること)していることを伝える。 ※この文書の内容の考察については、外岡慎一郎「二日酔いの大谷吉継」(『日本歴史』820号[2016年9月号])、外岡慎一郎『「関ヶ原」を読む-戦国武将の手紙-』(97～99頁)を参照されたい。</p>	日本歴史・820号-45頁 凶録・大谷吉継-人とことば-32頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 8月1日	長東正家・増田長盛・石田三成・前田玄以・毛利輝元・宇喜多秀家	筑紫主水	<p>人数を召し連れて早々に上坂するように命じる。</p> <p>※佐賀県史料集成では、前田玄以（徳善院玄以）の署名の下は（花押）となっているが、史料稿本では前田玄以（徳善院玄以）の署名の下は「花押」と記したうえで見せ消ちにして、その横に「印判」と記している。</p>	史料稿本・1600-17-7-1-20 (0005～0006コマ) 佐賀県史料集成・古文書編28巻-10号（8～9頁）
(慶長5年) 8月1日	毛利輝元	大谷吉継	<p>（大谷吉継は居城の敦賀城へ）帰城とのことなので申し上げる。「其課」のことを申し越してほしい。石田三成が昨夜（大坂城へ）来て（毛利輝元と）相談した。</p> <p>※石田三成と毛利輝元が相談したということは、この政権（石田・毛利連合政権）の中核が石田三成と毛利輝元であることを明確に示している。</p> <p>※この文書の内容の考察については、外岡慎一郎『「関ヶ原」を読む -戦国武将の手紙-』（55～64頁）を参照されたい。</p>	図録・大谷吉継と西軍の関ヶ原-18頁
(慶長5年) 8月1日	毛利輝元	益田元祥	<p>そのところ（勢多）での普請が緩んでいるように聞こえたので、追々（そのことについて）言う。家康よりの書状の案文（＝写し）を毛利秀元と吉川広家へ遣わしたので披見するように指示。宇都宮、真田、日光山で一揆が蜂起したことの注進があった。</p> <p>※家康が毛利輝元に書状を出しており、その書状が8月1日の時点で毛利輝元に届いていたことがわかる。どのような内容かは不明である。家康から毛利輝元へ詫びた内容か？</p>	山口県史・近世1下-37頁
(慶長5年) 8月1日	石田三成	青木一矩	<p>去月（7月）28日の飛札が今日（8月）朔日に着き、大坂で披見した。（石田三成は）昨日（7月晦日）に大坂へ着いた。小松方面の状況を了解した。（豊臣公儀では）各自が相談して、小松、大聖寺、丸岡その他へも（豊臣公儀から）御加勢をおこなう予定。（豊臣公儀から各地へ派遣する軍勢の人数に關する）御書立も決まったので、やがて御人数を（そちらへ）遣わすので安心するように伝える。今日（8月1日）伏見城本丸へことごとく乗り入れ、西の丸（など）いずれも焼失した。「殿主」もことごとく焼亡した。小松方面の状況を</p>	越前若狭古文書選-520～521頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
慶長5年8月2日	大谷吉継	はちやや右京進 (蜂屋隆長)	<p>追々注進するように指示。石田三成が人数を連れて、時日に寄らず(そちらへ)駆け付けて一戦をするつもりなので気遣いしないように伝える。</p> <p>※『越前若狹古文書選』(520頁)の解説には「同役に関する有力なる一史料」と評価している。「同役」とは「関ヶ原役」を指す。</p> <p>※宛所の青木一矩は越前北庄城主である。</p> <p>※「御加勢」、「御人数」というように「御」を付けて表記しているのは、豊臣公儀から遣わされる軍勢という意味によるものである。</p> <p>※「御書立」とは、『真田家文書』上巻(56号文書)の人数書立を指すと考えられる。よって、8月1日の時点で、この人数書立ができた(決定した)ことがわかり、豊臣公儀はこの人数書立をもとに各方面への派遣諸将と軍勢の人数を決定したことがわかる。</p> <p>※8月1日の時点では、石田三成が北陸方面へ出陣予定であったことがわかり、このことは注目される。</p> <p>※この文書の内容の考察については、外岡慎一郎『関ヶ原』を読む - 戦国武将の手紙 -』(64~71頁)を参照されたい。</p>	図録・大谷吉継と西軍の関ヶ原-22頁
慶長5年8月2日	大谷吉継	今泉村	<p>制札(禁制) … 3ヶ条</p> <p>※図録『大谷吉継と西軍の関ヶ原』(22頁)ではこの禁制が残されたことにより、この日付の前後に大谷軍(先鋒隊か)が木の芽峠を越え、あるいは海路も用いながら、敦賀から北へ移動していたことがわかる、としている。</p>	図録・大谷吉継と西軍の関ヶ原-22頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 8月5日	毛利輝元	益田元祥	そのところ(勢多)での普請がやがて調う、とのこと了承。こちら(大坂か?)の様子は福原広俊へ述べた。 ※勢多での普請がいつからいつまで続いたのか検討する必要がある。	山口県史・近世1下-37頁
(慶長5年) 8月8日	毛利輝元	益田元祥	毛利秀元が陣替えについて、人数のこと(軍勢の追加という意味か?)を(毛利輝元のところへ)言ってきたが(それはできないので)やむを得ない。こちら(毛利輝元)もやがて出陣して、たぶん先様(先手という意味か?)には毛利元康を追わずで、そちらに人数(軍勢)を加えることはできない。九州衆などが(これから)上着るので、(九州衆が大坂に)着き次第に追々(そちらに)上らせるつもりである。このことを毛利秀元へ言ってほしい。特に東国の到来(東国からの情報という意味か?)は昨日(8月7日)以後はなく、家康もかかわらず、知らせがあり次第に(毛利輝元は)即時に発足するつもりなので、そちらでのことは緩みがないように指示。 ※8月8日の時点で、①毛利秀元の陣替えが予定されていたこと、②毛利輝元の出陣が予定されていたこと(→西上する予定の家康との対戦か?)、③九州の諸大名はまだ大坂に到着していなかったこと、④毛利輝元は家康の西上を予想して情報を収集してたことがわかる。その意味では、この文書は重要な文書である。	山口県史・近世1下-38頁
(慶長5年) 8月8日	毛利輝元	佐波広忠	村上元吉・同景親を(大坂へ)呼び寄せるため、交替の3人を(そちらへ)指し越すので(阿波国猪山城〔徳島城〕の)在番等を緩みなくするように指示。	萩藩閥閥録・2巻-639頁 山口県史・近世1下-38頁
(慶長5年) 8月8日	徳川家康	黒田長政	吉川広家からの書状を詳しく披見した。(家康は)毛利輝元とは兄弟のごとくに申し合わせをしていたので(今回の状況を)知らな家康は)不審に思っていたが、(今回の状況を)輝元は)知らなかつたこのことを聞いて(家康は)満足している。	山口県史・近世1下-56頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 8月9日	榎本元吉・二宮就辰・ 堅田元慶・福原広俊	佐波広忠・御米奉行 中	村上元吉・同景親を(大坂へ)呼び寄せるため、交替の3人を(そちらへ)指し渡す。 ※冒頭に「為御意申候」とある。この「御意」が毛利輝元の御意なのか、或いは、豊臣秀頼の御意なのか検討する必要がある。 ※この文書の発給者4人は、大坂で毛利輝元の命令を代行する立場であったと考えられ、大坂と徳島の毛利家家臣相互の連携体制を具体的に知ることができる。	萩藩閩録・2巻-640頁 山口県史・近世1下-38頁
(慶長5年) 仲秋(8月) 初9日	玉仲宗琇 (=京都大徳寺112世)	毛利輝元	毛利輝元の大坂入城を千秋万歳、天下太平として祝う。 ※毛利輝元の大坂入城により「天下太平」としている点に注意すること。豊臣公儀の新政権(石田・毛利連合政権)の新しいスタートを祝う、という意味にとることができる。 ※山口県史・近世1下-39頁の「論断」には「閩ヶ原陣之時輝元公大坂入城之時、京・堺ノ限(分限カ)有者御祝儀申上ル」と記されている。	萩藩閩録・遺漏-320頁 山口県史・近世1下-39頁
(慶長5年) 8月10日	黒田長政	吉川広家	「御内意」の通り(黒田長政から)家康へ申し上げたところ、(家康から)長政へ書状を出したので、(その書状を吉川広家からの)使者にお目にかけた。この度の「一義」について、毛利輝元は知らなかったものであり、安国寺惠瓊一人の「才覚」であると家康も思っている。(毛利輝元が)家康と御入魂になるように(吉川広家が)「御才覚」することが「専用」であると(長政は)思っている。	山口県史・近世1下-56頁
(慶長5年) 8月10日	毛利輝元	益田元祥	毛利秀元は勢州方面へ陣替えすべき旨を長束正家・安国寺惠瓊より申し越してきたので、早々に陣替えするように指示。先様(先手という意味か?)のことは、早くも諸城を下した、とのことである。一両城は現在も(落城が)済んでいない、とのことであるが、これも「渡口」(意味不明)を遮断し続けければ、珍しいこともなく、(落城して)人質を出すのであろう、と思う。とにかく「無人」とのことなので	山口県史・近世1下-39頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 8月10日	毛利輝元	益田元祥	<p>人数（軍勢）に困窮している。（よって）こちらの衆も出陣する。この方の衆が中途にいるのであれば、急がせてそちらよりも追い立てるように指示。</p> <p>※毛利秀元の勢州方面への陣替えの指示が長束正家・安国寺忠瓊より出ている点に注意すること。この2人が戦局全体の軍勢配置を考える作戦立案の指令塔だった、ということか？</p> <p>毛利秀元の（勢州方面への）陣替えを片時も急ぐように指示。こちら（＝毛利輝元）も知らせがあり次第に発足する。東国の到来があれば（東国からの情報があれば、という意味か？）、申し越すように指示。</p> <p>※この時点で毛利輝元が毛利秀元の陣替えを急がせていること、毛利輝元がすぐにも出陣予定であることに注意したい。</p>	山口市史・近世1下-39～40頁
(慶長5年) 8月13日	小早川秀包	(桂広繁)	<p>この方（上方か？）のことは、家康が（西）上すれば、善悪の了見を豊むことになる。（中略）とにかく家康が（西）上すれば、一戦に極まる。</p> <p>※桂広繁は、久留米城代として久留米城（小早川秀包の居城）を守備していた。</p> <p>※この書状には、この時点での状況が詳しく記されているので、よく検討すること。</p> <p>※家康が西上した場合は一戦する覚悟としている点は、この時点（8月13日）における家康との対決姿勢という意味で注目される。</p>	山口市史・近世1下-40頁
(慶長5年) 8月15日	毛利秀元	宍戸元行	<p>毛利秀元は今は江州（近江国）土山に在陣している。先手の状況により、一両日中に勢州（伊勢国）に陣替する予定である。</p> <p>※8月15日の時点で、毛利秀元は近江土山に在陣（伊勢への出陣の途上）していたことがわかる。</p>	萩藩閥閥録・1巻-568頁 山口市史・近世1下-41頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 8月18日	毛利輝元	大友義統	(大友義統からの人質として) 息子の (大友) 長蔵 (=長熊丸) について懇ろに承ることを伝える。	大友家文書録 4 (『大分県史料』) - 107頁
(慶長5年) 8月18日	堅田元慶・毛利元康	久枝又左衛門	「其表」(伊予国) の様子を承るため、曾禰景房を指し渡した。 ※(慶長5年) 8月20日付瀧本寺非遊老宛堅田元慶・毛利元康連署状 (萩藩閩閩録・3巻-2頁) と関係すると考えられる。	萩藩閩閩録・3巻-2頁 山口県史・近世1下-42頁
(慶長5年) 8月18日	堅田元慶・毛利元康	山田兵庫助	「其表」(伊予国) の様子を承るため、曾禰景房を指し渡した。 ※(慶長5年) 8月20日付瀧本寺非遊老宛堅田元慶・毛利元康連署状 (萩藩閩閩録・3巻-2頁) と関係すると考えられる。	萩藩閩閩録・3巻-2頁 山口県史・近世1下-42頁
慶長5年8月18日	井原元直	記載なし	鉄砲衆50人の相談の旨を申し上げる予定である。番所普請以下を堅く申し付けるように指示。	萩藩閩閩録・遺漏-33頁
(慶長5年) 8月20日	増田長盛	林助右衛門	この度の伏見城乗り崩しの時の手柄を比類のないことと賞する。褒美として、金子3枚と加増200石を扶助する。 ※大阪城天守閣紀要42号(14頁) では「感状」としている。	大阪城天守閣紀要42号-5、14頁
(慶長5年) 8月20日	堅田元慶・毛利元康	瀧本寺非遊老 (=非有=長宗我部盛親の臣)	「与州邊之儀」について、曾禰景房と相談するように指示。長宗我部盛親へ申し入れて、書状等を取り付ける予定であるが、そのことは口上で申し上げる。頭分として、村上武吉・同元吉父子を差し出すので、その心得にて働くように指示。	萩藩閩閩録・3巻-2頁 山口県史・近世1下-43頁
(慶長5年) 8月20日	福原広俊・吉川広家・安国寺恵瓊	益田元祥	不慮の喧嘩があったことに仰天している。(益田玄祥の) 御堪忍を奇特千万とする。	山口県史・近世1下-43頁
(慶長5年) 8月20日	福原広俊・吉川広家・安国寺恵瓊	益田元祥	不慮のことについて、(益田元祥の) 考えを聞いて奇特の御分別とする。	山口県史・近世1下-43頁
(慶長5年) 8月20日	吉川広家	益田元祥	この度のひとまずの御分別を賞する。	山口県史・近世1下-43頁
(慶長5年) 8月20日	福原広俊	益田元祥	不慮の喧嘩があったことを聞いて仰天したが、当座の御堪忍を奇特とする。	山口県史・近世1下-44頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 8月20日	毛利輝元	村上元吉	「其方」(村上元吉)は早船で大坂へ上り、この文箱を安国寺惠瓊・二宮就辰へ届けるように指示。我々も(8月)28日に出陣するので、早々に右の返事が出次第に夜に日を継いで(国許へ)下るよう指示。 ※萩藩閥録・3巻-819頁では、この文書を慶長5年に比定しているが、慶長5年8月20日の時点では、安国寺惠瓊は大坂に不在(伊勢へ出陣)であることや、慶長5年8月20日の時点では、毛利輝元は大坂城に在城しているが、この文書の内容では、8月20日の時点で毛利輝元は国許にいるように読めるので、この文書は慶長5年以外の年次に比定すべきであろう。	萩藩閥録・3巻-819頁
(慶長5年) 8月20日	大友義統	柴田左馬助	この度、諸国の大名衆の人質を石山(=大坂)に召し置かれている。そのため、(次男の大友)長藏(=長熊丸)も御城(=大坂城)へ堪忍させている(人質に出した、という意味か?)。	大友家文書録4(『大分県史料』)-107頁
(慶長5年) 8月23日	大友義統	小田原主膳正	(大友義統の豊後国への)入国について留守居を申し付け、油断なく奉公するように指示。	大友家文書録4(『大分県史料』)-108頁
(慶長5年) 8月24日	毛利輝元	吉川広家	毛利秀元の小姓と益田元祥の者の喧嘩で益田元祥が堪忍したことを(毛利)家への大忠とする。	山口県史・近世1下-45~46頁
(慶長5年) 8月24日	宍戸元次	—	伊勢国津城合戦の頸注文→頸の合計数は37	山口県史・近世1下-48~49頁
(慶長5年) 8月24日	渡辺 長	—	八月廿四日に津の城二の丸において討ち取った頸の注文	山口県史・近世1下-51頁
(慶長5年) 8月25日	宍戸元次	村上三介	昨日(8月24日)の御手柄(伊勢国津城攻め)を賞する。やがて大坂へ披露して、御書を出される予定である。 ※「大坂」というのが毛利輝元を指すのか、或いは豊臣秀頼を指すのか、検討する必要がある。 ※「御書」というのが毛利輝元の書状を指すのか、或いは、豊臣秀頼の書状を指すのか、検討する必要がある。「御書」	萩藩閥録・4巻-258頁 山口県史・近世1下-52頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 8月25日	内藤久太	楊井春俊	とは感状であろう。 昨日(8月)24日、勢州(伊勢国)津城を包囲し、即時に西元由と相談して、本丸を目指して大手の門を破って切り入り、その中途にて楊井規春が鉄砲疵を受けたことを賞する。(敵の)頸一つを討ち捕らえたが「其刻之事」にて無念であり、やむを得ない。	萩藩閥閥録・3巻-298頁 山口県史・近世1下-52頁
(慶長5年) 8月25日	—	堅田元慶・榎本元吉	伊勢国津城合戦の頸注文→頸の合計数は55	山口県史・近世1下-46~48頁
(慶長5年) 8月25日	毛利元政	—	伊勢国津城合戦の頸の注文	山口県史・近世1下-48、53頁
(慶長5年) 8月25日	福原広俊	—	八月廿四日の津城における討ち捕らえた頸の注文	山口県史・近世1下-49~50頁
(慶長5年) 8月25日	安国寺恵瓊	増田長盛・堅田元慶	討ち捕らえた頸の注文(伊勢国津城合戦)	山口県史・近世1下-50~51頁
(慶長5年) 8月26日	増田長盛	吉川広家	この度、津城を乗り崩したことを御手柄として褒賞する。美濃方面では敵(家康方軍勢)が大河(=木曾川)を渡り、赤坂(美濃)まで放火して撤退できずに(赤坂にいまだ)いることを伝える。そのため、その方面(伊勢国津)の(吉川家の)軍勢を追々(美濃赤坂方面へ)転進するように指示した。この方(=大坂城の秀頼様)より(増援の)軍勢を(美濃赤坂方面へ)遣わされる予定なので、(敵を)すべて討ち果たすべきことは眼前である。 ※実際には、増援部隊は大坂から美濃方面に派遣されることはなかったが、8月26日の時点ではこうした増援計画があったことになる。8月26日の時点では、まだ大津城籠城戦がおこっていないからなので、その後の大津城籠城戦の勃発により、大坂から美濃方面への兵力の増派計画は実施されなかったのかも知れない。このような大坂から美濃方面	山口県史・近世1下-53頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 8月27日	毛利輝元	村上武吉・宍戸元貞・ 村上元吉・曾禰景房	<p>への増派計画が実現していれば、その後の美濃方面での戦局は違ったものになっていた可能性もある。</p> <p>藤堂高虎の領分、加藤嘉明の領分への軍事侵攻を指示。津城(伊勢国)については、一昨日(8月)24日に切り崩した。美濃方面は敵が出陣してきて、大河(木曾川)を越えて深く入ってきたため、この度、残らず討ち果たすように命じたので安心するように伝える。</p> <p>※大坂城に在城していた毛利輝元が、家康方軍勢の木曾川渡河を正確に把握していた点に注意すること。この時点(8月27日)で、毛利輝元は家康方軍勢の討伐を命じている(つまり、家康との対決姿勢を明確にしている)点に注意すること。そして、この時点(8月27日)で、毛利輝元が家康方軍勢との対戦の行方に楽観的見通しであったことは注目される。</p> <p>※豊臣公儀(石田・毛利連合政権)が家康方の大名の居城受け取りをしたことは西国で広く見られる(木付城、田辺城、徳島城〔猪山城〕、伊賀上野城)。よって、伊予国内の藤堂高虎、加藤嘉明の居城受け取りをしようとして毛利輝元の指示で伊予侵攻したことは、毛利輝元の私的な軍事侵攻ととらえるべきではなく、豊臣公儀(石田・毛利連合政権)にとらえられた大名領国の収公ととらえるべきである。つまり、伊予国の収公は豊臣公儀の中で毛利輝元が担当した、というところであろう。</p>	萩藩閥閥録・3巻-1~2頁 山口県史・近世1下-54頁
(慶長5年) 8月27日	毛利輝元	宛所の文字が不明 (粟屋元吉カ)	<p>津(伊勢国)の城を(8月)24日(25日カ)に乗り崩し、(敵を)悉く討ち果たした各自の手柄を賞する。(津城の)二の丸へ立ち入ったかどうかについて申し越すように指示する。(津城の)二の丸へ(在番を)入れ置かないと役に立たない。(そのことについて大坂城に在城している)増田長盛の使者がどのように述べているのか、を尋ねる。</p> <p>※津城を8月24日に乗り崩した、としているが、8月25日が</p>	萩藩閥閥録・3巻-194頁 山口県史・近世1下-55頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年カ) 8月29日	福原広俊	堅田元麿	正しい。 こちら(伊勢国津)で相談したように、渡辺広が(大坂城へ)参上するので、(毛利輝元の)御前においてしかるべきように取り成しを頼む。	山口県史・近世1下-56頁
(慶長5年8月カ)	大友義統	—	この度、大名衆の質人(=人質)を召し置くので、(次男の)長蔵(=長熊丸)を御城(=大坂城)へ馳忍をした(人質に出した、という意味か?)。(大友義統は)豊後へ下る。	大友家文書録4(『大分県史料』)-107~108頁
(慶長5年) 9月3日	萩彦衛	曾禰景房	(今回)「不慮之御弓矢」がおきたことはやむを得ない。「其元」が「御理運」に命じたことは満足していると察する。「此方」は加藤嘉明が東国へ(上杉討伐のために)出陣して、現在は(国許に)帰陣していないので、その気遣いを推量してほしい。(加藤嘉明は)増田長盛とは入魂であるが、(現時点では距離的に)隔たっているので、万事が(増田長盛の)思し召しのままにはならないだろう。加藤嘉明のことも「左右分別」には及ばないだろうか。「爰元」のことは、加藤嘉明次第であろう。※この文書の発給者の「萩彦衛」は加藤嘉明の家臣で国許の留守居か？ ※「不慮之御弓矢、出来」という記載からは、関ヶ原の戦いなど慶長5年における一連の国内の争乱状態を同時代人がどのように認識していたのかがわかる。	萩藩閩閩録・3巻-3~4頁
(慶長5年) 9月3日	増田長盛	佐竹元真、他8名	各自が「當城」(大坂城)への加勢として在番するが、本丸、二の丸は御女房衆がいるので、加勢を入れることは延引する。三の丸を(毛利家の加勢の衆へ)渡す予定なので、(この文書の宛所になっている毛利家の加勢の衆が)受け取り、両方の門口の御番(在番)をするように指示。もし、本城(本丸、二の丸)へ(加勢の)人数が入る場合は、押しとどめるように指示。無理に(加勢の)人数が入る場合は、増田討ち果たすように指示。そうでなければ、見合わせて(増田長盛のところへ)注進するように指示。舟も渡すので、海	萩藩閩閩録・3巻-608頁 山口県史・近世1下-58頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 9月6日	井伯入紹恩	清水景治	<p>(大坂湾)の方も(敵などの)人数が(海側から)入らないように御番(在番)するように指示。</p> <p>※9月3日の時点で、毛利家の加勢衆を大坂城三の丸に在番させて大坂城の警備を厳重にしようとしていたことがわかる。大坂城三の丸の両方の門口の在番として、大坂城三の丸は馬出し曲輪を指しているように考えられる。このことは、大坂城三の丸がどこを指すのかを考えると、一つの判断材料になると考えられる。</p> <p>※光成準治『関ヶ原前夜』(69～70頁)、萩藩閥閥録・3巻一608頁、山口県史・近世1下-58頁は、この文書における「當城」を大津城に比定している。しかし、①この文書の日付である9月3日の時点で大津城は落城していないのに大津城の在番の指示を増田長盛を出すのはおかしい、②この文書を発給した増田長盛は大坂城に在城していたので「當城」は大坂城を指すことになる(大津城であれば「其城」と書くはずであり、自分〔増田長盛〕が在城していない城を「當城」とは書かない)という理由から、「當城」は大坂城であると考えられる。</p> <p>※光成準治『関ヶ原前夜』(70頁)では、この文書における「海」を琵琶湖と解釈しているが、この「海」は文字通り、海であり大坂湾と解釈した方がよいと思われる。</p>	山口県史・近世1下-59頁
(慶長5年) 9月6日	井伯入紹恩	清水景治	<p>栗屋四郎兵衛が大津の在番として出て行き、「無人」にて(大津の)「町むき」にいる、とのことである。大津(城に城主・京極高次が籠城したことは)思いがけない覚悟に変わったものであり、やむを得ない。(大津城籠城に対して攻撃するため)毛利元康は大勢(の軍勢)にて駆け付けた。</p> <p>※この場合の在番は、大津の在番であり、大津城の在番ではない点に注意すること。</p> <p>※この書状の内容により、京極高次の大津城籠城の開始は9月6日より前であることがわかる。</p>	山口県史・近世1下-59頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
慶長5年9月8日	根来岩室坊勢意	阿曾召就郷	申し定める人数のこと一騎馬50騎、轡差35人、弓50挺、鉄炮500挺、鑓150本、馬乗小者500人、徒歩小姓50人、合計1335人。この人数(軍勢)は大坂にいたので、明日(9月9日)、御用次第に出陣する。 ※この人数は「森口御張番」についた(萩藩関閣録・1巻一496頁下段12行目)。 ※鉄炮が弓の10倍、鑓の約3.3倍である点に注意すること。 ※馬乗小者が騎馬の10倍である点に注意すること。馬乗小者は騎馬の従者としての小者という意味か？	萩藩関閣録・1巻一495～496頁 山口県史・近世1下一60頁
(慶長5年)9月10日	大友義統	岐部又兵衛尉・柴田左馬助	昨日(9月9日)、別府浦へ上陸して立石村へ至り宿陣したことを伝える。今日(9月10日)は、方々の人数等を集めて働く覚悟であることを伝える。(大友義統からの人質として次男の大友)長蔵(=長熊丸)へ「倍心添」が肝要である、とする。 ※この文書の内容の解説については、三重野誠「別府と大友氏」(平成10年度別府史談会総会講演要旨)(『別府史談』12号、1998年)を参照されたい。	大友家文書録4(『大分県史料』)一109～110頁
(慶長5年)9月11日	大友義統	柴田左馬助	()右衛門尉は今朝、木()において鑓始めをして戦死したことを伝える。 ※大友義統による木付城攻撃についての内容と思われる。 ※()は文字が欠けていることを意味する。 ※「鑓始め」とは一番鑓という意味かも知れないが、その意味については今後の検討課題としたい。	大友家文書録4(『大分県史料』)一112頁
(慶長5年)9月12日	福原広俊	堅田元慶	福原広俊の組の内の湯原元経が長く病気のため、名代として弟の(湯原)春広に人数を添えて最前より出陣している。	萩藩関閣録・3巻一476頁
(慶長5年)9月12日	福原広俊	福原元経	(湯原元経の)名代として弟の(湯原)春広と人数を堅固に命じて指し上らせた。	萩藩関閣録・3巻一476頁
(慶長5年)9月12日	乃美景継	記載なし	9月9日の野間内海合戦の頭注文	山口県史・近世1下一60～62頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 9月12日	村上景広	記載なし	9月9日の野間内海合戦の頭注文 ※「無尽集」巻七十七ノ浦備前覚書」（山口県史・近世1下-64頁）には、①伊勢の地へ数船の御船をさし向け、「御国」からは村上景広、乃美景継の船手をすべて差し出し、「大坂」からは菅達長（原文では「菅野平右衛門」としているが、「菅野」は「菅」の誤記と思われる）、村上通清を差し添えて（船を）廻した、②伊勢（志摩カ）の鳥羽の九鬼嘉隆のところへ、これらの諸将が行き、（攻める）方角について万事相談した、③そして、尾張の灘へ軍勢を出すことに決まった、④その後、尾張国内の大野という浦へ9月9日の未明に攻め入った、⑤その次に「二浦」（2つの浦という意味か？）へも同様に攻め入った、⑥9月9日の攻撃では放火はしなかった、ということが記されている。	山口県史・近世1下-62～64頁
(慶長5年) 9月12日	乃美景継	記載なし	9月10日の野間内海合戦の頭注文	山口県史・近世1下-64～66頁
(慶長5年) 9月12日	村上景広	記載なし	9月10日の野間内海合戦の頭注文 ※「無尽集」巻七十七」（山口県史・近世1下-69頁）には、①「かたかみ」という在所を未明に攻撃して、一軒も残らず放火した、②その次に野間の内海という浦へ攻撃を仕掛けたところ、これは源義朝が切腹した浦であるので、（敵はこちらの）「船本」（船の下という意味か？）へ軍勢を出して（船にいるこちらの軍勢を）防ごうとしたが、船からの攻撃が堅固だったので、ついには逃げた（敵に対して）多数追い討ちをおこなった、③（こちらの）「船本」から1里半（＝約5.9km）奥に源義朝の御影（＝肖像画）があるので、（その）寺の中へ（敵を）追い入れたが、後から（来る）味方がこままで 遠距離になるので、そうならないように、各自引き取るように命じて、残らず引き取った、④2日の間に「六浦」（6つの浦という意味か？）を攻撃して成功した、ということが記されている。	山口県史・近世1下-67～69頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 9月12日	益田元祥	榎本元吉	<p>御書を謹んで頂戴した。「此地」(＝南宮山方面)での「雑説之様子」は(これまで)たびたび安国寺惠瓊より(大坂の毛利輝元へ)申し上げた。今朝(＝9月12日の朝)家康(自身)の軍勢が(こちらに)着くまでは、どのような知らせもこちらにはなかったもので、(大坂の毛利輝元へ)注進しなかった。私(＝益田元祥)は、今日(大坂へ)向けて出発して、やがて大坂へ)参上しようと思っていたが、こちらでは(家康自身の軍勢が着くという)このような状況なので、(大坂へ)行くことは中止する。これらの内容をよろしく(大坂の毛利輝元へ)披露してほしい。</p> <p>※安国寺惠瓊からたびたび南宮山方面の情報を大坂の毛利輝元へ報告していたことがわかる。これらの書状が毛利家に伝存していないのは、関ヶ原の戦い後、毛利家の方で破棄したのであろうか。</p> <p>※安国寺惠瓊からたびたび南宮山方面の情報を大坂の毛利輝元へ報告していたことは、安国寺惠瓊が南宮山での毛利家軍勢の司令官であったことを示している。</p> <p>※9月12日の朝に家康自身の軍勢が着いた、という記載は注目される。このことは、南宮山に在陣していた益田元祥が家康自身の軍勢の動向を正確に把握していたことを示している。</p> <p>※なお、「9月13日付丹羽長重宛徳川家康書状」(徳川家康文書の研究・中巻-688頁)では9月13日に家康は岐阜へ着陣した、と家康が報じているので、その前日の段階で家康自身の軍勢が岐阜に近づいている、という情報を益田元祥(南宮山に在陣)が把握していたことになる。</p>	萩藩関録・遺漏-202頁 山口県史・近世1下-70頁
(慶長5年) 9月12日	毛利輝元	益田元祥・神村元種	<p>追々(南宮山方面での)状況を(大坂の毛利輝元へ)申し越したことについて、祝着とする。まずもって(南宮山方面に)異儀がないことを了承。もし、(南宮山方面で)変わったことがあれば即刻(大坂の毛利輝元へ)申し越すように指示。安国寺</p>	山口県史・近世1下-70頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長6年)	吉川広家	—	惠瓊・福原広俊とその方面のことを相談するように指示。 ※9月12日の時点では、大坂城に在城していた毛利輝元は、家康自身の軍勢の動向（西上）を把握していなかったことがわかる。	山口県史・近世1下-70頁
(慶長5年9月17日)	吉川広家	—	※「吉川家文書之二」〈大日本古文書〉917号文書と同じ。 ※「吉川家文書之二」〈大日本古文書〉913号文書と同じ。	山口県史・近世1下-70～72頁
—	—	—	父（の栗屋）太郎左衛門は江州（近江国）大津城（の戦い）で戦死した。	山口県史・近世1下-75頁
(慶長5年) 9月13日	毛利輝元	井上元直	「其方」の子の（井上）元常の被疵を心配し、養生することを指示する。 ※大津城攻めに関係すると考えられる。	萩藩閥閥録・2巻-302頁 山口県史・近世1下-75頁
(慶長5年) 9月13日	毛利輝元	井上元常	「其方」（井上元常）の被疵を心配し、治療することを指示する。 ※大津城攻めに関係すると考えられる。	萩藩閥閥録・2巻-302頁 山口県史・近世1下-75～76頁
(慶長5年) 9月13日	堅田元慶	清水景治	「其元」のこと（＝大津城攻め）が少しもはかどらないので、「爰元」（＝大坂）での評判（が悪いのは）やむを得ない。右衛門殿（具体的人物名の比定は不詳）は高田小左衛門に人数（＝軍勢）を添えて、「其元」（＝大津城）の外構を破った、と昨日（書状をこちらへ）差し出した。一切油断しないように指示。毛利元康（「元康様」）と相談して（大津城を）乗り崩す用意をすることが肝要である。玉葉の御用は、天野元信と栗屋景雄へ申し出るように指示。 ※大津城攻めが進捗しない状況から城攻めを督促していることがわかる。 ※玉葉（＝火薬）の御用について言及していることは、大津城攻めに鉄炮を多用していたことを示すと考えられる。 ※大津城には外構が存在したことがわかる。	山口県史・近世1下-76頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
慶長5年9月13日	大友義統	吉良三右衛門	※9月12日に大津城の外構を毛利方の軍勢が破ったことがわかる。 豊後立石表における黒田如水との合戦時に、眼前における鐘下の高名を賞する。「彼表」を取り納め次第に、「本地」(本領)のことは申すに及ばず「一廉加増」を申し付ける。	新修福岡市史・資料編、中世1-1042頁
(慶長5年)9月14日	大友義統	曾根崎河内入道・田北三右衛門尉	(大友義統の)着郡について(出された)書状では忠節を抽んずべき旨(が書かれていた)ことを見て)誠に喜ばしい。地下中の著到に披見を加えた。頼もしい次第は言うに及ばず、特に粉骨を頼みいる。	大友家文書録4(『大分県史料』)-115~116頁
(慶長5年)9月15日	毛利輝元	宍戸元行	京極高次(大津城主)が許可も得ず帰城して(豊臣公儀に対して)逆意を構えたので、即時に(大津城を攻めて)二の丸まで押し詰めて乗り崩し、数百人を討ち捕らえたところ、(大津城主の)京極高次は種々の詭言を述べて、剃髪して出てきたので一命は助けて今朝(9月15日の朝)、高野山へ遣わした。そして、城を受け取り、守備の軍勢を入れたので安心するよう伝える。「美濃口」のことも、丈夫に申し付けて「勝手案中」(思っている通り)であるので(やがて)よい知らせを追々聞かせることができよう。 ※9月15日の時点で大坂にいた毛利輝元が美濃方面の状況を楽観視していることは注目される。	萩藩閥閥録・1巻-567~568頁 山口県史・近世1下-75頁
(慶長5年)9月15日	宍戸元勝・井原元茂	清水景治	折紙を拜見した。仰せのように「其城」(=大津城)を切り崩した時、栗屋景雄、井上景貞と同様に(清水景治が大津城へ)乗り(込んだ)ことを(毛利輝元へ)申し上げた。そして、(清水景治からの)折紙を(毛利輝元は)直接御覧になり、確かに聞き届けられた。そのことは、重ねて別に(秀頼様より)仰せ出される予定である。「此面」(=大坂)では変わったことではない。 ※9月15日の時点では大津城を切り崩していた(=攻撃して落城させていた)ことがわかる。	山口県史・近世1下-76頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 9月15日	粟屋元貞	清水景治	<p>※9月15日の時点では、大坂で変わったことはない、としているので、関ヶ原の戦いでの敗報はまだ届いていなかったことがわかる。</p> <p>折紙を拝見した。「大津一着」(＝大津城攻めが決着したこと)については、清水景治と粟屋景雄などが相談して、一番に乗り(込んだ)ことを聞いた。「御拵之筋」(＝大津城落城による大津城主・京極高次との和睦)があるとのことなので、(大津城攻めの件は)もはや済むだろうと思う。やがて(大坂へ)帰ると思うので待ちたいと思う。</p> <p>※大津城攻めで、だれが一番乗りをしたのか、について特筆していることは注目される。</p> <p>※9月15日の時点で、大津城攻めは決着していることがわかる。</p>	山口市史・近世1下-76～77頁
(慶長5年) 9月17日	池田高祐(池田秀氏)	堅田元慶	<p>⁽⁷⁷⁾鹿(宍カ)戸元真のことは、この度、南宮山から各自が撤退した時、安国寺惠瓊よりの使者として、長束正家のところへ行ったが、諸勢に路次を押し隔てられ(＝遠ざけられて)、やむを得ず、(池田高祐が守っている)駒野(美濃国)の城下へ入った。そして、池田高祐と同道して来た。(宍戸元真は)前後、残るところのない働きであった。駒野の様子は(宍戸元真から詳しく申し入れる予定である。これらのことを毛利輝元へ取り成りしてほしい。</p>	萩藩閩閩録・1巻-569頁 山口市史・近世1下-85頁
(年次未詳) 9月17日	佐武元真	(原神右衛門殿其外衆中)	<p>※この文書における「當城」について、萩藩閩閩録・遺漏一63頁では、近江大津城に比定しているが、この文書の内容からは籠城した側のことを記しているように読み取れるので、「當城」というのは籠城した城(城名は不明)のことを指していると考えられる。よって、「當城」は、近江大津城ではないと考えられる。また、萩藩閩閩録・遺漏一63頁では、この文書の年次を慶長5年に比定しているが、こうした点を考慮すると、年次も慶長5年以外と考えられる。</p>	萩藩閩閩録・遺漏一63頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年) 9月18日	毛利輝元	佐波広忠・棕梨景良・仁保民少・三輪元徳、其外中	<p>先手(吉川広家カ)のことは和平が調い、当手の人数は悉く無事に中途まで退却した。よって、「其元」(猪山城〔徳島城〕)のことは必要なくなったので早々に「此面」(大坂カ)へ上るよう指示。そのことは蜂須賀家政にも申し入れた。</p> <p>※先手(吉川広家カ)のことは和平が調った、というのは、毛利輝元が吉川広家からの虚偽の報告(実際には和平は調っていないかった)をそのまま信じていたことによると思われる。</p>	萩藩閥閥録・2巻-639頁 山口県史・近世1下-78~79頁
(慶長5年) 9月18日	佐世元嘉	曾禰高政	<p>この度、(伊予正木城攻めの際)曾禰景房が戦死したこと了承。誠に御家(毛利家)に対して御忠貞の至りであり、大坂へ注進する。そして、貴所(曾禰高政)の御手柄の様子も上聞に達する。</p> <p>※毛利輝元の下知により伊予正木城(加藤嘉明の居城)を攻めたが、勝利を得られず9月17日に曾禰景房は戦死した(萩藩閥閥録・3巻-5頁)。</p>	萩藩閥閥録・3巻-2頁 山口県史・近世1下-79頁
(慶長5年) 9月19日	(毛利輝元)	福島正則・黒田長政	<p>この度、先手の吉川広家と福原広俊以下が御意を得たところ、(福島正則と黒田長政の)肝煎によって、家康の御懇意を得たことを忝く思う。特に(毛利輝元の)分国について相違ないことについて誓紙に預かり安堵している。(毛利輝元が)増田長盛、前田玄以と相談するので(家康への)取り成しが肝要である。</p> <p>※『毛利家文書之三』(大日本古文書)1023号文書と同じ。</p> <p>※毛利輝元の分国が安堵されるという条件はその後反古にされて減封されることになる。</p> <p>※毛利輝元が増田長盛、前田玄以と相談する、としているので、9月19日の時点でもなお、豊臣公儀の体裁を保っていたことがわかる。このことは逆に言えば、9月19日の時点では、いまだ家康は豊臣公儀を掌握していなかったことを示している。</p>	山口県史・近世1下-81~82頁
(慶長5年) 9月19日	毛利輝元	福原広俊	<p>「拵之儀」(=家康との和平)が吉川広家と福原広俊の「才覚」によって調ったことは祝着である。「弊家」(=毛利家)の</p>	萩藩閥閥録・1巻-145頁 山口県史・近世1下-82頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 9月22日	(毛利輝元)	池田輝政・井伊直政・ 本多忠勝	続き(とは)このことである。福原広俊の氣遣いへの謝辞を述べる。 ※吉川広家と福原広俊の「才覚」により和平が調った、というものは、毛利輝元が吉川広家からの虚偽の報告(実際には和平は調っていない)をそのまま信じていたことによると思われる。	山口県史・近世1下-82頁
(慶長5年) 9月25日	益田彦四郎	三輪元徳・佐和広忠	起請文前書…①この度、先手において、我等(=毛利輝元)の心底の通りに、吉川広家と福原広俊が御意を得たところ、(家康への)御取り成しをもって御分別を遂げられたことを忝く思う、②我等(=毛利輝元)の分国が(これまでと)相違なく(家康が)思し召されたことに誠に安堵している、③このうえは、(大坂城)西の丸を渡すつもりである、④以後、家康に対して、いささかも如在に思わず、表裏別心をしない、ということが書かれている。 ※『毛利家文書之三』(大日本古文書) 1025号文書と同じ。 ただし、1025号文書では「起請文前書案」とする。 ※この内容からすると、毛利輝元は領国の減封がなく安堵される、という条件(前提)で、大坂城西の丸を明け渡したことがわかるが、結果的にはこの条件は反古にされて、毛利輝元の領国は大幅に減封されることになった。	萩藩閥閥録・2巻-640頁
(慶長5年) 9月28日	池田高祐(池田秀氏)	堅田元慶	(阿波猪山城〔徳島城〕の)山上・山下共に間違いない受け取った。 ※この文書の発給者である益田彦四郎は、峰須賀家の家臣であると考えられる。 この度、それぞれ「不慮之仕合」により、長束正家が(南宮山から)撤退した時、宍戸元真は先手よりの使者として長束(正家)方へ行った際に、敵が後方を遮断したため、(毛利家の軍勢と合流できずに)同様に撤退した。しかし、毛利秀元のことについて心配したので、(毛利秀元の)指示が来るまで、	萩藩閥閥録・1巻-568頁 山口県史・近世1下-85頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長5年9月上旬カ)	大友義統	うは (= 乳母)	(駒野城を守っていた) 池田高祐が預かり、駒野の城に残りたい旨だったので、城中へ入れて、(駒野城からの) 退城の時に同様に近江まで撤退した。 ※南宮山からの撤退時、敵が後方を遮断したことがわかる。	大友家文書録4 (『大分県史料』) - 110頁
(慶長5年) 小春 (= 10月) 19日	玉仲宗瑠 (黄梅院宗瑠 = 京都大徳寺112世)	毛利輝元	この度の天下の様子には千変万化であり、御貴辺 (= 毛利輝元) が無事であるのは大慶である。 ※黄梅院は大徳寺 (京都) の塔頭であり、毛利家の京都における菩提寺である。 ※「この度の天下の様子は千変万化」という記載は、慶長5年の激動の状況 (両軍の勝敗の行方を含む) をうまく表現している。	山口県史・近世1下-95頁
(慶長5年) 11月13日	小早川秀包	桂広繁	御内状を詳しく披見した。「其元」 (= 久留米) のことは黒田如水に頼み、まずもって久留米は異儀がないように (久留米城代の桂広繁が) 「御才覚」をした。筑後のこと (= 筑後柳川城主・立花宗茂の帰国のことか?) を鍋島勝茂が聞いて下国した。立花宗茂の身上は済んだ (= 許された) ので、(小早川秀包の領国である) 久留米だけが断ることはできないと思っている。柳川で戦い (= 10月20日の柳川合戦) があつたうえは、(戦いがなかつた) 久留米は奇特のことであり、これは (久留米城代の桂広繁が) 尽力した首尾によるものと思う。毛利元鎮 (= 小早川秀包の嫡男) が島津攻めに行くことが決まった場合は、桂紀伊守を下国させる予定である。年内は、島津攻め (「薩州出陣」) は無用である旨を (家康が) 仰せられてとどまっている。 ※10月20日の柳川合戦が終わったあとの状況がわかる。 ※島津攻めに毛利元鎮 (= 小早川秀包の嫡男) が参加する可能性があつたことがわかる。	山口県史・近世1下-102頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容（摘要）	史料典拠
(慶長5年) 11月23日	毛利輝元	佐世元嘉	先日、広島から荷物に移した時に、岩倉五郎右衛門、相嶋仁右衛門、相嶋作右衛門が特に尽力したことを確かに聞き届けた。誠にこの心掛けは奇特である。よくよく、その方が心得て申し聞かせるように指示。 ※慶長5年11月23日の時点では、毛利輝元の広島城退去は完了していたことになる。	萩藩関録・4巻-13頁 山口県史・近世1下-102頁
(慶長5年11月カ)	小早川秀包	道保老・快友	去月（＝10月か？）22日の折紙と吉小兵の口上の内容を承知した。鍋島勝茂が筑後へ出陣して柳川衆（＝立花宗茂の家臣）との合戦があった、という知らせがこちらに来た。（小早川秀包の領国である）久留米のことは、黒田如水の指示で黒田直之が「其元」（＝久留米カ）へ行っただのであるうか。黒田如水が高良山へ着いた時、（小早川秀包の嫡男の）毛利元鎮が出て対面して首尾良くいった。このことについて御両人の肝煎は比類がない。まづもって安堵した。（小早川秀包の嫡男の）毛利元鎮が薩摩方面へ出陣する。拙者（＝小早川秀包）の身上は黒田長政に（家康へ）言ってもらおうようにと肝煎を頼んだが、最前の首尾違いによって、なかなか調い難くなった。中国（＝毛利家）の使者である福原広俊は、黒田長政の肝煎ではなかなかうまくいかないだろう、と述べたため、最前に榊原康政へ言うことになるので、福原広俊、黒田長政へは（そのことを）言うべき旨を朝主馬・上九兵へ返事をした。 ※この書状には月日の記載がないが、書状の内容から柳川合戦（10月20日）のあとであることがわかるので、慶長5年11月頃と比定できる。 ※小早川秀包の身上の赦免について、黒田長政を通して家康へ取り成してもらおうことはうまくいかなかったもので、家康側近の榊原康政へ家康への取り成しを頼むようになったことがわかる。 ※島津攻めに毛利元鎮（＝小早川秀包の嫡男）が参加する予定であったことがわかる。	山口県史・近世1下-103頁

月 日	発 給 者	宛 所	内 容 (摘要)	史料典拠
(慶長6年) 4月11日	毛利輝元	桂快友・椋梨一・桂紀伊守	小早川(毛利)秀包の死去について残念である。 ※萩藩閔閔録・1巻-47頁に、久留米城(小早川秀包の居城)籠城について詳しい記載(侍200人、雑兵500余人が籠城した)がある。	萩藩閔閔録・1巻-46頁
(慶長6年) 5月17日	長宗我部盛次(盛親カ)	曾禰高政	去年は「不慮之一乱」につき、御親父(曾禰景房)の「御仕合(戦死)はやむを得なかったが、御手柄のことを承り、比類のないことである。長宗我部盛親は、現在は伏見に在宅している。いまだ身上も相済まない状況であり、(そのことを)御推量してほしい。 ※「不慮之一乱」という記載からは、関ヶ原の戦いなど慶長5年における一連の国内の争乱状態を同時代人がどのように認識していたのかがわかる。 ※この文書の発給者の考定については、中脇聖氏より御丁寧な御教示を賜った。記して感謝する次第である。	萩藩閔閔録・3巻-4頁
(慶長6年) 10月12日	毛利輝元	毛利元俱	去年の津の城(攻め)などの時も先手を心掛けたことを各自が言っているので、誠に肝要のことである。 ※萩藩閔閔録・1巻-32頁に、津城攻めについての詳しい記載がある。 ※山口県史・近世1下-51頁では「七月十二日」としている。	萩藩閔閔録・1巻-32頁 山口県史・近世1下-51頁

《参考文献》

- 『山口県史』史料編・近世1下(山口県、1999年)
『萩藩閔閔録』1巻(山口県文書館、1967年)
『萩藩閔閔録』2巻(山口県文書館、1967年)
『萩藩閔閔録』3巻(山口県文書館、1970年)
『萩藩閔閔録』4巻(山口県文書館、1971年)
『萩藩閔閔録』遺漏(山口県文書館、1971年)
上島有編著『東寺文書聚英』図版篇(同朋舎、1985年)
上島有編著『東寺文書聚英』解説篇(同朋舎、1985年)

- 『義演准后日記』第2 (史料纂集) (続群書類従完成会、1984年)
- 『佐賀県史料集成』古文書編28巻 (佐賀県立図書館、1987年)
- 『大阪城天守閣紀要』42号 (大阪城天守閣、2018年)
- 『新修福岡市史』資料編、中世1 (福岡市、2010年)
- 『新修大阪市史』史料編5巻、大坂城編 (大阪市、2006年)
- 中村孝也『徳川家康文書の研究』中巻 (日本学術振興会、1959年)
- 『當代記 駿府記』(続群書類従完成会、1995年)
- 牧野信之助編纂『越前若狭古文書選』(三秀舎、1933年発行、福井県名著刊行会、1971年復刻)
- 米山一政編輯『真田家文書』上巻 (長野市、1981年発行、2005年改訂)
- 「大友家文書録」4 (『大分県史料』34巻、大分県教育委員会編纂、大分県中世文書研究会発行、1981年)
- 『吉川家文書之二』(大日本古文書) (東京帝国大学、1926年)
- 『毛利家文書之三』(大日本古文書) (東京帝国大学、1922年)
- 『益田家文書之四』(大日本古文書) (東京大学史料編纂所、2012年)
- 『島津家文書之五』(大日本古文書) (東京大学史料編纂所、2016年)
- 史料稿本・1600-17-7-1-20 (東京大学史料編纂所のサイトにおける所蔵史料目録データベース (<http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller/>))
- 図録『大谷吉継一人とことば』(敦賀市立博物館、2015年)
- 図録『大谷吉継と西軍の関ヶ原』(敦賀市立博物館、2016年)
- 光成準治『関ヶ原前夜ー西軍大名たちの戦い』(日本放送出版協会、2009年)
- 外岡慎一郎『「関ヶ原」を読むー戦国武将の手紙ー』(同成社、2018年)
- 外岡慎一郎「二日酔いの大谷吉継」(『日本歴史』820号 [2016年9月号])
- 渡邊大門「関ヶ原合戦における小早川秀秋の動向」(『政治経済史学』599・600号、日本政治経済史学研究所、2016年)
- 三重野誠「別府と大友氏」(平成10年度別府史談会総会講演要旨) (『別府史談』12号、別府史談会、1998年)
- 拙稿「豊臣公儀としての石田・毛利連合政権」(『史学論叢』46号、別府大学史学研究会、2016年)
- 藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成 (第2版)』(思文閣出版、2017年)
- 『日本国語大辞典 (第二版)』11巻 (小学館、2001年)